

～参考資料～

豊岡の鞆の歴史

出典元 一般社団法人 豊岡鞆協会ホームページ

豊岡の鞆の歴史

①鞆のルーツ、杞柳産業の興り

自然・社会的条件による杞柳産業の発達

豊岡盆地は日本海岸から15キロの内陸にありながら、海面との高低差は約2メートルにすぎない。このため但馬地方を北流する円山川は、豊岡盆地に入って淀み、蛇行して流れ、荒原（あわら）と呼ばれる湿地帯を随所に形成した。この荒原地帯には杞柳の原料となる「コウリヤナギ」が多く自生していた。

行李を編む時に麻糸は、古来、但馬麻苧（あさお）として、すでに全国的に知られて、多く生産されており、また、行李に使う緑竹も多くあった。このように、杞柳材料が地元で容易に入手した。当地方は、冬期には積雪で農業等ができず、また耕地が狭小で新田開発の余地が少ないことなどの自然制約によって生み出された余剰労働力があつた。この農民余剰労働力が、副業として生計の助けになる杞柳製品づくりへかりたてたところである。



仮 挿

春、刈り取った柳は、剥皮の準備のために水田や湿地に仮挿する。
5月上旬に剥皮する。



柳行李出荷風景
【明治初期】



御進物行李【昭和初期】
十帖行李とも言う

柳行李は、通気性・容量生、耐久性にすぐれており、生活の向上にともない衣類などの保存容器としての実用性が高く高く評価された。さらに、交通手段の発達とともに人の往来が頻繁になり、縄掛けをすれば直ちに運搬道具ともなる柳行李の運搬性の利点が認められ、庶民的共感を呼び需要が増大していった。

豊岡は東京・大阪等の大消費地から遠く離れており、製品の出荷に大きなハンデがあつた。当時、陸上輸送手段の駄馬賃は割り高であつたが、柳行李は容量は大きいが軽いため、また、大きな行李の中にだんだんと小さい行李をつめ込む入子方式が可能だったので割安につき、遠隔地にあるにも関わらず、一度に大量な製品を出荷することを可能にした。

豊岡の鞆の歴史

②杞柳産業の発展

藩の保護奨励による杞柳産業の発達

杞柳産業の発達には、京極藩の保護奨励によるところが大きい。
1668 年、京極伊勢守高盛が丹後国から豊岡に移封され、柳の栽培並びに製造販売に力を注ぎ、土地の産業として奨励したのが始まりである。

その後、1726 年、京極藩は3万石から1万5千石に減知となり藩財政が困窮し、その一助にと、1763 年 12 月に「触書八カ条」を布告して、杞柳製品の専売制をはかった。それは、大阪の骨柳問屋を一軒指定して上方で専売させ、そこから上納金を納めさせる間接的統制である。1810 年ごろには大阪問屋は4軒になった。

取引の活性化にともない、大阪問屋との間にも軋轢も生じ始めたことや、積極的に藩財政の立て直しをはかるため、1822 年1月、八鹿・油屋喜右衛門と九日市上町・坪屋源左衛門の設立を許し、上方筋への直売りを禁じて、柳行李の専売制を強化した。さらに4月、骨柳師に対して、縁かけ・籐引きなどの一切の杞柳製法の秘密保持や、原材料の移出禁止を行った。この方針は1823 年12月の産物会所設立に発展していった。

宵田町に設立されたこの産物会所は、現在の組合指導的な役割を持ち、柳行李の生産者、商人達への資金援助、原料の斡旋、製造販売指導などを行っていた。

一方、播州印南部魚崎村網干屋与衛地2名柳行李播州陸出運送の特権を与えて、大阪までの運送にあたらせ、荷物の分散、個数の減少も防いだ。

1829 年、独自の立場で新たな市場開発を狙い、物産会所より分離した大阪登骨柳物産会所を設けた。これは藩政改革の一環として大阪市場依存を排して全国の消費地と直結をはかったものと思われる。その後、中町の船屋良平が、骨柳引合いのため、参勤上府に従い、江戸で市場の開拓に従事したり、幕末には、大骨柳屋・飯骨柳屋・仲買・縁掛屋などの生産・販売機構も整い、全国的名声の基礎を築いた。

明治4年頃の、行李の生産高は約18万個で、うち飯行李が全体の75%を占め、次が荷行李の17%あまり、以下帳行李、文庫、上下行李の順になっていた。

豊岡の鞆の歴史

③柳行李からかばんへ

かばん産業のおこり -1

豊岡かばんとしては、明治14年、八木長衛門が第2回内国勸業博覧会に2尺3入子、3本革バンド締め「行李鞆」を創作出品したと伝えられており、また明治35年の第5回内国勸業博覧会出典目録には遠藤嘉吉朗の「旅行鞆」が見られる。

この3本革バンド締めの柳行李は、外観はトランクと同じであったが、トランクと呼ばれずに柳行李と呼ばれていた。この事は、これが従来の杞柳製品の改良品で、一般杞柳製品技術が応用されたものであり、また、柳行李で名高い豊岡で作られたことが、鞆と呼ばれず行李と呼ばれた原因と言われている。



行李鞆【明治14年頃】

八木長右衛門が第2回内国勸業博覧会に創作出品したものと同型。これが後の豊岡におけるかばんの源流であると言える。



パリ万国博出品【明治33年】

交通手段の発達にとまなう内外旅行者の増加により、携帯運搬用の容器の需要が起こり、それに応じるさまざまな工夫発明がなされた。明治39年、服部清三郎の「鞆型柳行李」、明治42年、宇川安蔵のドイツ製品を模倣した「バスケット籠」等の創案が相次いだ。「バスケット籠」は底編みをし、立てりを差し、引き籐を巻き上げて合い口を付けてまとめた籠と思われる。この携帯に便利な鞆型、バスケット型の小型籠の多くは輸出された。

大正6年、革バンドやアテ革など革附属をつくって行李メーカーに販売していた奥田平治が、従来の三本革バンド締めの柳行李にウルシを塗り、錠前を取り付けた「新型鞆」を創案した。これが豊岡がかばんとして売り出した最初のものといわれている。また奥田平治の片腕として働いていた植村賢輔は鞆生産へ自信を持ち、まもなく皮革製品に着目した箱型鞆の製造を始めた。

豊岡の鞆の歴史

③柳行李からかばんへ

かばん産業のおこり -2

大正10年、松本孝のバスケット型柳行李鞆が出現した。信玄袋にとって代わり、「大正バスケット」の名で、実用的でハイカラな携帯用旅行具として大流行した。さらに奥田平治は、当初は電器絶縁物などに開発されていたヴァルカナイズ・ファイバー（木綿またはパルプ繊維を硬化させた堅紙）靴滑り（中敷き）を東京で手に入れて、これを鞆の材料に使えないかと考え遠藤嘉吉郎の援助でファイバーシートを入手した。最初は柳行李の椶掛けや筆箱の製造で試し昭和3年頃、松本孝の協力を得てファイバー鞆の商品化に成功した。その後、ファイバー鞆を手がける人が増え、昭和5年には11名におよんだ。昭和9年、生産者30名、生産数月産八千個が、昭和13年には、組合員60名、月産約八万個に達し杞柳製品の全国的な販売網に乗って販売されていった。



籐バスケット【大正10年頃】

信玄袋にとって代わり、「大正バスケット」の名で実用的で、ハイカラな携帯用旅行かばんとして大流行した。



ハートマン型ファバー鞆
【昭和6年頃】

角に帯を合わせてビョウで止めた頑丈なつくり。名称はアメリカの鞆メーカー、ハートマン社に由来。

昭和11年に開催された、ベルリンオリンピックの選手団のかばんとして、豊岡のファイバー鞆が採用されるなど、この頃には「ファイバー鞆」が、豊岡かばんの主流を占めるようになった。しかし、満州事変以来、昭和12年に日中戦争、昭和16年に太平洋戦争と戦火が拡大するにつれて材料の確保が困難になり、材料の購入・販売など組合を組織して統制しなくてはならなくなった。このため、昭和16年には月産15万個に至りピークとなったが、その後減少し昭和18年には月産10万個を割るようになった。

豊岡の鞆の歴史

③柳行李からかばんへ

かばん産業のおこり -3

昭和24年には、ファイバー鞆が杞柳製品にとって代わり豊岡町の工産品生産高の第1位を占めるようになったが、昭和25、26年には、再び杞柳製品がファイバー鞆を圧倒した。これは昭和24年に創案されたラッカー吹付塗装の「サンマーケース」が大流行したことや軍用行李が警察予備隊員の衣類運搬用として使われたことによる。これも長くは続かず、原料柳の不足などにより、昭和27年には再びファイバー鞆などの鞆のう製品が優位に立ち、以後大勢は変わらず、豊岡の主産業は「柳行李」から「ファイバー鞆」へと移った。

ファイバー鞆の時代は昭和29年頃まで続いたが、朝鮮動乱後の不況、金融引締めによる資金難などにより大打撃を受けた。業界は生産停止や操業短縮で切り抜けようとしたが、この危機を救ったのは、塩化ビニールレザーなどの新しい素材の出現であった。



サンマーケース【昭和24年頃】

ラッカー吹付塗装のスーツケース型の柳のバスケット。海水浴などのレジャーに使用。

豊岡の鞆の歴史

④かばんの変革と豊岡の近代史

塩化ビニールレザーの出現と縫製技術の導入

戦後の高分子化学工業の急激な発達にともなって、昭和28年頃からビニールレザーなどがかばん素材として出始めていた。

当時、豊岡でのかばん製作技術は、ビニールレザーなどをファイバー鞆に貼りつける加工が主体であった。縫製はふとん袋と柳行李やファイバー鞆の裏地縫が若干あるだけで、本格的な鞆のうに対する縫製技術は全くなかった。

昭和27年頃、東京で、マニラから持ち帰ったかばんを参考にして「スマートケース」が考案された。これは別に素材を袋状に縫製し、後で枠に被せたもので、素材のビニールレザーが大変軽く、急速に伸びていった。特にこの「スマートケース」は、映画「君の名は」で岸恵子が持ち、大流行した。



ふとん袋【昭和20年頃】

信玄袋にとって代わり、「大正バ敷蒲団1枚、掛け蒲団2枚が入る。麻布、木綿布などで作られた。転居の際には必需品であった。



スマートケース【昭和29年頃】

鋼板の枠を作り、ビニールレザーを被せチャックで開閉する手箱形のもの。寸法は尺3、4、5寸が圧倒的に売れ、婦人向きの小旅行又は洋裁鞆として愛用された。



ニューブライトケース
【昭和29年頃】

枠をベニヤで作り軽量化を図り、縫製加工したビニールレザーを被せたもの。金具の開口とプラスチック製の把手を使用。

豊岡でも「スマートケース協会」（支部長卯野福吉）を設立し、本格的に生産することになった。これにともない、昭和29年頃からミシン加工による縫製技術が導入された頃である。

この頃、山下庄一や尾崎豊一が、製造したトランクをニューブライトケースとして実用新案申請し、これが登録されたことから、業者多数がこれに参加し「ニューブライトケース工業界」を設立し発展を期待した。

豊岡の鞆の歴史

⑤高度経済成長期の豊岡

かばん産地の確立 -1

昭和28年、従来のスーツケースの胴枠を改造し、外型崩れ防止にピアノ線を使用したかばんが生まれた。軽くて強靱であることなど、これまでの欠陥を補っていたので他商品を圧倒した。これを取り入れ昭和31年7月にオープン協会豊岡支部を結成し、オープンケースの生産に全力を注いだ。また、輸出もアメリカを中心に急激な伸びを見せ、鞆産業は急上昇した。



ビニールオープンケース
【昭和31年頃】

ピアノ線で周囲を補強し、ファスナーで三方が開閉できるようにして従来のスーツケースの欠陥を補った。軽く強靱なため、他の商品を圧倒した。



ギンガムチェックオープンケース
【昭和35年頃】

薄地の平織り綿布に格子柄の輸出用オープンケース

鞆産業は「岩戸景気」（昭和33年～昭和36年）を背景に昭和35年には昭和30年に比べ、工業数約2倍、生産高約8倍に躍進した。かばんの輸出は昭和43年の最盛期までに年率50%の近い飛躍的な伸びを示した。輸出初期の輸出用オープンケースは、塩化ビニールレザーで製造されたものが多く、一セット十入子が普通で、その仕向地はアメリカ向けが多かった。昭和43年頃には、リネン地柄物オープンケースが主体で84%がアメリカ向けになっていた。昭和35年5月、輸出用かばんの品質管理のため、財団法人ゴム製品検査協会兵庫検査所豊岡支所を設置し、輸出向けビニール鞆の検査を行い、品質向上に務めた。

豊岡の鞆の歴史

⑤高度経済成長期の豊岡

かばん産地の確立 -2

昭和39年頃になると、蓋に2本、底に1本ファスナーがあり、容量に応じて3通りの厚みに調整できる、通勤及び旅行かばん「エレガントケース」が作られ、大量生産、大量販売された。このため、市外にもかばんの外注加工先が増え、遠く、東は福井県小浜市、西は鳥取県日野郡、南は小野市あたりまで伸び、日本かばんの四大産地の一翼を担うようになった。

昭和45年後半から内外で需要停滞が顕著になり、特に昭和46年8月以降、ニクソン声明によるアメリカの経済政策の転換、急激な円高、さらにはオイルショックの影響で、輸出は激減した。このため鞆業界も先行き不安が広がったが、原材料を塩化ビニールからジーンズ・キャンバスなど布はく類へ、また、販売先を国内需要切り替えることにより、輸出急減の危機を脱した。



エレガントケース
【昭和39年頃】

色は黒がほとんどで蓋に2本、底に1本ファスナーがあり、容量に応じて3通りの厚みに調整できる。通勤及び旅行かばん。

豊岡の鞆の歴史

⑤高度経済成長期の豊岡

オープンケースと協会の設置

豊岡産地形成に大きな影響を与えたかばんにオープンケースがある。その販売量は発祥の地である東京をしのいでおり、これにより豊岡が日本かばん四大産地として、不動の地位を確率させたものといっても過言でない。

従来のスーツケースは、固定的で柔軟性に乏しく、重量に欠陥があり、より軽いものが求められていた。昭和28年頃、東京の渡辺善次郎、寺田宇之助が、従来からの欠陥であった胴枠を金属带状板に補強溝を設け、周囲にピアノ線で形を整えた、軽量で、強固な胴枠でかばんを作ったのが始まりである。

この軽量なオープンケースは、塩化ビニールレザー、ファスナーなど素材の品質向上や、飛行機によるあたらしい旅行時代の始まりと相俟って大変な人気となった。このオープンケースという名前は、当時、野球のオープン戦が大人気であったことと、商品名の語尾に「ン」を付けた物は大ヒットしたという縁起を担いで名付けられたものである。「ン」が付いた商品としては、自動車の「スカイライン」や「クラウン」などがあった。



羽板付オープンケース
【昭和40年頃】

かばんの本体をベニヤ板で作り、底に羽根部を設けたオープンケース。別名カルテックスとも呼ばれた。

昭和31年に実用新案の登録にともない権利者の保護と将来のアイデアの育成に向け、東京でオープン協会が設立された。引き続き、豊岡においても大阪、名古屋と同様に支部を設立し、協会に加盟した。この豊岡支部の加盟については、加盟に否定的であった、オープン協会側を、加鹿実太郎が熱意で説き伏せたといわれている。

この協会は、昭和31年から10年間運営され、その間、オープンケースの品質の向上や価格の決定、会員章・証票の発行や多くの違反事項などの解決に努めてきた。